

友への手紙（2）

奈荷



第3信 2014年5月28日

私は毎週都内に出て二泊し、学校に行き仕事をします。分身を楽しんでいるような面白さがあります。

それから電車に乗り町に帰るのですが、電車が郊外に向かうにつれて、空気が変化するのを感じることができ、まるで風が私の帰りを待っていてくれたような気がします。

このように、ちょっと遠出をして帰ってきたときに感じる穏やかな感覚を、あなたは味わったことがあるでしょうか。

五月は心の中でゆっくりと一人で口ずさむ歌です。

花は咲きはじめますが、まだ思い切り咲いているというほどではなく、賑やか過ぎることはありません。

草や木が順序よく自然の幕を開け、清明節が過ぎて起こる雷雨、あちこちに顔を出す閉じこもっていた虫たち、風が塀の角を吹きわたっていくときの音、木の幹を叩いていくときの音、それらすべてが私に子供の頃を思い出させます。何もすることがないとき、私はいつも外にある大きな木に登り、際限のない空想にふけたものです。

それで毎年五月に風が吹きはじめると、まるで旧友が私の家の門を叩いているように感じるのです。草は毎年新しく生え、すきまがあるところにはどこでも手を伸ばし、顔を出します。

木も毎年剪定されても、悲しんでいて痛そうな表情を少しも見せず、すくすくと成長し、嬉しそうな様子です。私には草も木も愛しく思えます。

来世では、私は人間には生まれたくありません。草が生い茂っている小さな丘の上で、草に代わって、五月の風に草の心を打ち明けることのできる、小さなことも見逃さない能力を持つ名木になりたいものだと思っています。

五月は一瞬にして去って行ってしまいます。ではまたのお便りまで、さようなら。



